

ほくが 学校に 行かない理由

子どもだからって やりたくない事を
やらされるのが 僕は いやなんだ。

漢字の練習をして 何が楽しいのか 僕には分からない。
割り算の練習をして 何の意味があるのか 僕には分からない。

やりたくない事に やる気なんて 出てこないよ。
やりたい事にこそ やる気は 出てくるものだよ。

音楽の時間だからって どうして歌を歌わないといけないの？
図工の時間だからって どうして絵を描かないといけないの？
体育の時間だからって どうして走ったりしないといけないの？

どうしていつも時間割りの命令をきかないといけないの？
僕は時間割りの命令をきくロボットなんかじゃない。

僕は 僕の心が 歌いたい時に 歌って

心が 絵を描きたい時に 描いて

心が 走りたい時に 走るんだ。

いつだって 僕は 僕の心に素直でいたい。

みんなが 学校に行ってるのに

僕だけが 学校に行ってないと

「病気かもしれないから、お医者さんに診てもらった方がいいよ」
って言われたけど 僕は病気じゃないよ。

勉強は つまんないから したくない。

勉強を させられる学校には 行きたくない。

自分の気持ちに正直にしているだけで 病気じゃないよ。

自分の気持ちに嘘をついて 我慢して行く方が

病気になっちゃうよ。

僕が いい子だって思われたために

自分の心に嘘をついて 学校に行くようになったら

もう誰も僕の事を 病気かもって 言わなくなるんですよ。

素直に大人の言う事を聞いて学校に行く子は 病気じゃなくて

自分の心に正直に

行きたくないから学校に行かない子は 病気かもしれないって。

そんな判断の仕方 おかしいよ。

自分の心に 嘘ついて どんな意味があるの？

自分の心に 正直でいたら どうしていけないの？

テレビでは この国の偉い人達が嘘を言ってるとか 言っていないとかってニュースになっているけれど

人は偉くなると 嘘をつくの？

それとも 嘘をつくのが上手な人が 偉くなれるの？

この国のシステムでは偉い人は 嘘をついても許されるの？

そんなこと ないよね。

大人でも子供でも 嘘はだめだよ。

僕のお母さんは学校に行かない僕を叱らないよ。

行きたくなったら 行けばいい。

行きたくなかったら 行かなくていい。

僕が自分で決める事が 一番大切だつて言ってるよ。

僕を『学校に行け！』つて 叱らないから

『学校に行け！』つて 子供を叱らないのは

親の義務を放棄しているのと 同じ事だ。

甘やかして育てるから 子供がわがままになるんだ」

つて親戚のおじさんから お母さんが 叱られてる。

お母さんはおじさんから 叱られても怒りもしないし 気にもしていないよ。

「おじさんも心配してくれているんだよ」

っておじさんの言葉を いい風に受け取っている。

お母さんは自分とは違う考えの人に対しても心を開いているよ。

そしてお母さんは自分のユニークでオリジナルの考えを相手に ためらうことなく ストレートに伝えるよ。

だから お母さんは 時々違う考えの人から

『変わってる』とか『変人だね』とかって言われるよ。

『変人だね』って言われると お母さんは嬉しいんだって。

世の中を変えて行く人の事を『変人』って言うんだって。

世の中を少しでも良い方向に変えていく事に 多少なりとも情熱を感じてしまうお母さんにとって

「変人だね」

って 言われるのは ほめられているみたいに聞こえるんだって。

「変人だね」

って言われて喜ぶお母さんは まさしく【超変人】だね。

人と違っている事に不安を感じないお母さんは

人と違っている事をしてる僕の事を 不安に思っていないよ。

お母さんは 僕の気持ちや考えを大切にしてくれるよ。

そんなお母さんが 居てくれるから

僕には 安心できて 心が落ち着く居場所があるんだ。

もし 誰も僕の生き方を許してくれる人がいなかったら

僕には居場所がなくなつて 生きるのが辛くなる。

死んでしまいたい気持ちになるくらい辛くなる。

とても広い心で 僕を理解して

僕が在るがままの僕でいる事を認めてくれるお母さんが居てくれるから

僕は

「生きていてもいい」

「生きていたい」

って思えるんだ。

お母さんはおじさんからは『親の義務を放棄している親』だって言われているけれど僕にとって お母さんは『僕の命の守り人』

『僕の将来』とかよりも

『僕の命』を何よりも大切に思い

『僕の命』を生きる方向に向けてくれる

僕もお母さんの事を大切に思っている。

お母さんは

親の期待を押し付けず

余計な事は言わず

余計な事は聞かず

僕を信じて疑わず

根っからの明るさで

僕を見守ってくれている。

誰が何と言おうと 僕にとって お母さんは

『親の義務を果たしてくれている親』であり

『僕の命の守り人』なんだよ。

「生きていれば 自ずと未来はやってくる。

命が消える瞬間に 未来が消える。

命の中に未来がある。

命が未来をつくるんだ。

【取り返しのつく事】と

【取り返しのつかない事】を

見極める事が 重要なんだよ」

っってお母さんが言っている。

学校は 一般的なことをそつなくこなせる大人になるための勉強をするところですよ。

文字を読んだり書いたりするとうごく一般的な事をこなすのが

僕はすごく苦手なんだ。

僕は読み書き困難だ。

友達だと3日練習すれば できるようになる事も

僕だと3カ月もかかってしまうんだ。

1年生で習い始めた平仮名を 全部読み書きできるようになったのは…

3年生になった時だった。

人と同じ事ができるようになるために 僕には人の何倍もの努力や時間が必要なんだ。

文字が読み書きできるといふ事が前提で 学校の勉強は組み立てられているでしょ。

僕に得意な事と 苦手な事があるとしたら

僕にとって 学校でする勉強とは 苦手な事はつかりをするといふ事になるんだ。

僕は苦手な事をがんばるよりも 得意な事を のぼしていききたいと思っっているんだ。

きつと僕は一般的なタイプじゃないんだと思う。

僕のひいじいちゃんは 29歳の時 原因不明のまま一夜にして 目が見えなくなった。

それまで漁師をしていたひいじいちゃんは 目が見えなくなったので 漁師を続けられなくなったんだ。漁師をして家族を養えなくなったひいじいちゃんは人生に絶望してしまい、海で入水自殺しようとした。自殺しようとしていたひいじいちゃんを ひいばあちゃんが見つけ

「何をバカな事をしとるんじや！死ぬな！

生きろ！目を醒まさんか！」

って言いながら ひいじいちゃんのほつぺたを思いつきりひっぱ叩いて自殺をやめさせた。家族と生きる事を決意したひいじいちゃんは

鍼灸師になるための学校で4年間猛勉強して 晴れて国家資格も取れて 鍼灸師になれた。

人生の途中で失明したひいじいちゃんは 学校の生徒のなかでは一番の年長者だったんだって。

ひいじいちゃんが鍼灸師の学校に通っているあいだ ひいばあちゃんが一所懸命働いて

ひいじいちゃんを支えながら 子どもたちを育てたんだって。

ひいじいちゃんは視力を失った代わりに、脳内で身体の立体ビジョンを描く能力や

指先で触わる事で色々な事が分かる、鋭敏な指先の触覚能力を得る事ができたんだ。

指先の触覚で得る情報を脳内の身体ビジョンと結びつける事で、たくさんのお患者さんを治してきたんだ。

『見えない』ことは欠落ではなく

脳の内部に新しい扉が開かれること。

視覚障害者とは

健常者が使っているものを使わず

健常者が使っていないものを使っている人。

人間の身体とは 本当にもうまくできている。

身体は 変化進化していく無限の可能性を秘めているんだよ。

身体の本質とは そういうものなんだよ」

って身体の専門家のひいじいちゃんが 言っていたんだって。

文字を読み書きする能力を

完全には開かないという選択をして生まれてきた 僕の脳の内には
いったいどんな扉が開かれる可能性が 潜んでいるのだろうか？

僕の脳は文字を読み書きする能力を得ない代わりに

どんな能力を得る選択をしたのだろうか？

僕の脳の内部の今はまだ閉じている新しい扉が 完全に開かれた時

僕はどんな能力を 使いこなす事になるのだろうか？

きつとその能力は

文字を読み書きする能力を完全に使いこなしている人が使っていない種類の能力
と言う事になるんだろうね。

だから僕みたいなタイプは

文字を読み書きするという能力は使わず

文字を読み書きする能力を使いこなしている人が

使っていない能力を使いこなす人ってことなんだろうね。

そんな僕は

普通の人なら簡単にできる事が最低にしかできなくて

普通の人なら簡単にはできない事が最高にできる

最低と最高を併せもつタイプってことなんだろうね。

だから僕の中の最低の部分は 最低のままでもいいと思っっている。

どんなに努力しても 最低が普通になる可能性は低いんだと思う。

ある部分が最低になる事で 別のある部分が 最高になるんだから。

何でもそつなくこなせる普通タイプに僕はなれない。

最低と最高を併せもつタイプが 僕だから。

視力を失ったひいじいちゃんに

『新聞を上手に読めるように練習しなさい』とは 誰も言わないでしょ。

視力はあるのに

文字を上手に読み書きできない僕みたいなタイプは

ひいじいちゃんよりも 周りから理解されずらいんだらうね。

僕は平仮名50音を読み書きできるようになるのに

2年もかかったんだよ。

がんばったら がんばったぶんだけ成果につながるんだつたら

僕も やる気を持ち続ける事ができるかもしれないよ。

だけど 僕にとって 学校でする勉強は
がんばったことが がんばったぶんだけ 成果につながる。
まるで無意味な砂を積み上げる作業をしているみたいに感じるんだ。

勉強にやる気を出せない僕の気持ち分かってくれるかな？

「そうなのかもしれないけど 読み書き計算ぐらいできなかつたら
大人になった時 困るんじゃないの？」
って声が聞こえてきそうだね。

僕には 読み書き困難と言う特性があるんだけど

その特性以上に 僕を僕たらしめる一番の特性があるんだ。

その一番の特性とは、

『僕のやる気のスイッチを押せるのは僕だけ』だって事。

周りから馬鹿に思われたくないから【勉強しよう】とか

勉強しないと叱られるから【勉強しよう】とか

勉強しないと大人になった時困るから【勉強しよう】とか

僕の外側からの【勉強しよう】では

僕のやる気のスイッチをオンにはできない。

僕の内側から本気で何かをやりたいと思った時

僕の内側から込み上げてくる本能を伴うような やりたいという気持ちだけが

僕のやる気のスイッチをオンにする事ができるんだ。

本能を伴うようなやりたいと思う事をする事が

僕の脳の内部の新しい扉を開ける鍵になるんだと思う。

僕の本能だけが 僕の脳の内部に潜んでいる能力が何なのかを知っているんだと思う。

僕のいい所をのばしてあげるから 登校しておいでって 学校は言うけれど

僕のいい所が何なのか言葉で説明できるの？

僕のいい所をのばすためのカリキュラムを 学校は用意できるの？

僕のいい所がのびるように 僕を導ける人が 学校にいるの？
すべての子供のニーズに応える事が 学校にはできるの？

学校には行かない子ども側のだけに問題があるのではないという事を
分かってもらえるかな？

『不登校は問題行動だ』って言うんだったら

不登校を生み出す問題が学校側にも 潜んでいるって事だと思っよ。

だけど本当のところは 僕にも学校にも問題なんかないって事だと思っよ。

僕は たんに こんな僕だったって事。

学校は たんに そんな場所だったって事。

たまたま 僕と学校の相性が 合わなかった。

ただ それだけの事だっと思っよ。

僕は勉強が苦手だから特にそう感じるんだと思っけど テストが大嫌いだ。

勉強ができるとかできないとかって僕の個性の一部でしかないのに

テストの点数だけで優劣をつけられて僕って言う人間の全部が

ダメ人間みたいなラベルを貼られると

本当に自信をなくしてしまうよ。

僕が平仮名全部を読み書きできるようになったのは 3年生の時でしょ。

だから 2年生の時なんて テストを受けても問題文の意味すら何も分からないから

いつもテストは 白紙のままの0点はっかりだったんだ。

先生から間違ってもいいから 何か書きなさいって言われても

問題文の意味すら分からないんだから

間違った答えを書くことすらできなかったんだよ。

先生に反抗して何も書かないわけじゃないんだけど

テストの間 する事がないから ボーとしていると

「ボーとするな！」って怒られるし 本当に困ったよ。

誰だって 自分が理解できない外国語で書かれたテストを受けさせられたら
問題文の意味すら分からないから 間違いを書くことすらできないでしょ。
テストが終わるまで ボーとしているしかないでしょ。

クラスの迷惑にならないように 静かに座っているだけでも 怒られるんだから
僕にとって テストの時間は 最悪で恐怖の時間でしかなかったよ。

学期末にはお母さんにサインをしてもらうために

0点のテストの束を家に持って帰るでしょ。

0点のテストを持って帰っても お母さんは全然僕を叱ったりしなかったよ。
だから 家にテストを持って帰るのは 全然怖くなかったよ。

でもね テストの束を渡した時に 僕は ぼつりと言ったんだ。

「0点ばかりだね。」

0点しかとれない僕なんて生まれて来なかった方がよかったかな？」
ってお母さんに言ったんだ。

お母さんは悲しそうな顔をしたけど、すぐにニコツとして

「ママに任せといて！」

って言ったんだ。

ちやうど翌日は、個人懇談があったんだ。

お母さんは担任の先生に

「テストをやめて下さい」

って直訴したんだ。だけど先生からは

「馬鹿なこと言わないで下さい。ここは学校ですよ。

テストをするのは当たり前でしょ。」

って言われたんだ。

日本では学校でテストをするのは当たり前でしょ。

そんな日本での当たり前も国が違えば、当たり前ではなくなるんだよ。

デンマークでは法律で小中学校でテストをして序列化することが禁止されているんだ。序列化されることで、自信を失う子どもたちを出さないようにするためなんだって。

日本では

テストや競争を通して子どもを伸ばそうといった考え方が一般的だけど

デンマークでは

一人ひとりの能力には優劣があり 得意な科目もあれば不得意な科目があるという考え方で
テストでの序列化をしないんだって。

だから『苦手な科目がある』と感じている子どもは少ないんだって。

デンマークの教育環境は

【自分が何をやりたいか？】

が強く問われて 人との競争や偏差値は重視されないんだって。

自分のやりたいことを見つけ、それを原動力につなげることで

【自分で自分の道を切り開いていく】

という価値観が 国自体の文化で、特徴と言えるんだって。

日本では

「テストをやめて下さい」って言うお母さんはクレイジーな人扱いされるけど

デンマークだと まともな意見の持ち主って事になるんだね。

そして 日本の学校で行われている事をデンマークの法律にあてはめると
法律違反をしているって事になるんだね。

僕はデンマークのやり方に大賛成だな。

テストで誰かと比べられないし

自分が本当にやりたいという気持ちを原動力に 自分自身を伸ばしていけるから。
ね！ やっぱ僕は日本の学校のやり方には合っていないでしょ。

きつと僕だけじゃないと思うよ。

学校の主役は子ども達なんだからさ

デンマークと日本のやり方 どっちがいいか 子どもの意見を聞いてみてよ。

きつとデンマークのやり方に賛成する子ども達の方が多くなるって僕は思うよ。

僕達はどうすれば 僕達が望む 僕達のためになる教育環境を

手にすることができのだろうか？

教育に競争を取り入れるやり方は 子ども達のやる気を刺激して学力を伸ばす
というメリットがあると思うよ。

でも一方で このやり方に デメリットはないだろうか？

勉強が苦手な子ども達は テストで序列化される事によって自信を無くしたり
勉強ができない事が悩みになってしまいうね。

親が偏差値重視のタイプだと

テストで悪い点数を取った子どもは 親から厳しく叱責されるよね。

学校全体で偏差値を重視する学校だと

教師は生徒の偏差値をあげなければとプレッシャーを受けるので
勉強にやる気を出さない生徒には感情的になったり

過剰に厳しくあたったりする事もあるよね。

偏差値重視の価値観は 子ども達にいらいらやストレスを与え

いじめが発生しやすい環境を つくってしまう事があるかもしれないよね。

文部科学省の調査によると 2017年度に自殺した子供の人数は250人なんだ。
勉強できない事を悩んで自殺した子供が 18人もいるんだよ。
悩みを周りの誰にも打ち明けられず 無言のまま自殺した子供が140人もいるんだよ。

自殺した生徒が置かれていた状況	人数
家庭不和	31
父母等の叱責	18
学業等不振	18
進路問題	33
教職員との関係での悩み	7
友人関係での悩み	13
いじめの問題	10
病弱等による悲観	6
えん世	18
異性問題	10
精神障害	15
不明	140
その他	7

2017年度文部科学省調査

対象：国公立小・中・高等学校（複数回答可）

悩みを打ち明けれる相手がいなかったのかな？

それとも打ち明けても 自分の気持ちを理解してはもらえないと思ったから 打ち明けなかったのかな？

自分が何かを言ったところで 何も変わる事のない 周りや社会に絶望したのかな？

今の教育システムと毎年250人近い子どももの自殺に因果関係はないと言えるのかなあ？

因果関係があつたとしても 他の社会システムと密接に結びついている教育システムを変更するのは難しいのかなあ？

倒壊して子供の命を奪う危険なブロック塀を 撤去する難しさとは
まったく違う難しさがあるんだろうね。

たとえ教育システムを変更できたとしても、連動する社会システムをも変更できないと問題を解決した事にはならないんだろうね。

いじめとか自殺とか それぞれの価値観とか
心が関係してくるものは

システムを変更しただけで とうにかなるっていう問題ではないんだろうね。

答えは どこにあるんだろう？

そもそも 答えはあるのかなあ？

僕みたいに今の教育システムになじめず

学校に行かなかつたり 行けなかつたりしている子どもが

小・中・高等学校で 193, 674人いるんだつて。

学校に行きたくない僕にとって 家は唯一の居場所なんだよ。

僕の将来の事を考えて 先生たちが 僕がどうにか学校に行けるようにと

いろいろと考えてくれたり 声を掛けたりしてくれている事は 分かっているよ。

社会では『学校に行くのが当たり前』っていう価値観が常識だって言う事も分かっているよ。

僕の価値観は 社会では非常識だって 言われるかもしれないけど僕は僕の価値観を大切に生きていきたいんだ。

そうしてこそ 僕が僕を生きるという事だから。

さいわいにも 僕の家族は 僕の価値観を認めてくれたから

僕には 居場所があるんだ。

でも もし家族が 僕の価値観を認めてくれなかったら

僕には居場所がなくて追いつめられたんだと思う。

無言で自殺した子ども達の気持ちに 僕には何となく分かる気がする。

どこにも生きていられる居場所が なかったんじゃないのかな？

学校にも家にも居場所がない子どもにとって必要なのが

別の居場所なんだと思う。

居場所があれば自死を選択せず 生きていく選択をする子どもがいるかもしれない。

子どもの自殺を防ぐための万策は無いと思う。

できる事を少しずつでも実行していく事で 未来が変わっていくんじゃないのかな。

最後に僕の好きな言葉。

『一寸先は光

一寸の光を灯せる人でありたい』

2019年3月現在5年生の三男坊は、4年生の2学期から学校に行かなくなりました。

不登校児童の親の立場になった私は“不登校についての勉強”を始め、2017年2月に『教育機会確保法』という法律が施行されたことを知りました。これまで不登校といえは問題行動であり、あつてはいけないことだとされてきましたが、そうではなくて「学校に通わない選択肢もある」ということ、子どもの状況に対して学校や教育機関が対応しきれないということを国がはつきりと認めた法律です。法律の施行に伴い、文部科学省から教育委員会へ「フリースクールや家庭など学校以外の場での学習等に対する支援を充実させるように」との通知も出されました。

2017年度の不登校児童数は19万人、保健室登校や遅刻・早退が多い【不登校予備群】の中学生は33万人、あわせて50万人以上の児童が既存の教育から離脱しているのが実状です。そして毎年、250人近い子ども達が自死を選択しています。若い人の自殺の原因の第1位は学校問題です。

子どもが「学校に行きたくない」と親に言うのは相当な勇氣が必要です。そして親も子どもの将来の事を考えると、子どもの『学校に行きたくないという気持ち』を受け入れるのは相当な覚悟が必要です。すべての子どもが親に「学校に行きたくない」と伝えることができるわけでもなく、すべての親が子どもの『学校に行きたくないという気持ち』を受け入れられるわけでもないので。

私自身が【学校に行きたくない子ども親の立場】を経験するなかで「学校に行きたくない。だけど家にもいさせて

もらえない。どこにも自分の居場所がない」そんな子どもが自死に追いつめられているのではないかと考えるようになりました。私は自分の気付きを『ぼくが学校に行かない理由』として手紙にして学校に伝えました。学校からの応答はなく、さらに、子どもの【居場所】として公設民営のフリースクールの設立を要望しました。学校からの返事は「池田市にある公設民営のフリースクールは理想的ですが、市にはお金がありません」でした。

守口市は市役所内に「くらしサポートセンター守口」があります。そこは【生活困窮者自立支援事業】の一環として「子ども食堂」や「ひきこもり・不登校など子どものことを心配する家族の会」に協力しておられます。「くらしサポートセンター守口」の方に学校に提出した手紙『ぼくが学校に行かない理由』を読んでいたところ「子どもの不登校を受け入れられずに苦しんでいるお母さんに【不登校に対する新たな視点】を提供することができないかもしれないので、冊子にしていろいろな人に読んでもらいませんか」と提案してくださいました。

こうして『ぼくが学校に行かない理由』という冊子ができました。

私は今、もしかしたら社会の既存の常識や価値感になじめない・なじもうとしない子ども達のなかにこそ、閉塞した社会に新しい風を巻き起こす未来の種が潜んでいるのかもしれない、と思いつつ春を迎えています。

(2019年3月吉日)

お読み頂きありがとうございました。

ご感想やご意見など、ぜひお聞かせください。

その際、この冊子の入手経路と購読動機（テーマに関心があった/内容・構成がよかった/表紙が気に入った etc.）をお書きください。

下記のメールアドレスまたはファックスにてご送付をお願いします。

くらしサポートセンター守口

FAX 06-6998-4512

E-Mail info@yarukimitekure.com

ご協力ありがとうございました。